

17

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
もりた やすえ 森田 保江	女性	85歳	19歳	富岡西部

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

戦争が激しくなり、豊橋陸軍病院が鳳来寺高等家政女学校（今の鳳来寺高校）に疎開しており、その傷病兵達の衣類やシーツの修繕をしていました。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

豊橋陸軍病院内で仕事中、ラジオの玉音放送で聞きました。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

私は、8人兄弟の上から2番目の長女です。職業軍人（将校）の父は、当時2度目の召集で、昭和19年の戦争の激しい中、名古屋城内にある部隊へ入隊しました。50歳の時でした。

1度目の召集は、昭和14年でした。当時は、兄が16歳（豊橋四中）、私は14歳（女学校）、6人の妹や弟は3人が小学生、3人が幼子でした。子ども8人を残し、父は大ぜいに見送られて、実家近くの鳳来寺駅から出征していきました。私たち8人の兄弟と母は、二度も父のいないさみしい日々を送ることになりました。母の負担は大きく、大変なものでした。

ですから、終戦を放送で知った時は驚きましたが、もうお父さんは戦争に行かなくてもいいんだと、胸をなで下ろしました。しかし、父はなかなかもどりませんでした。上官の地位にいたため、他の兵隊さんを復員させた後で帰ってきました。肉づきのよい父でしたが、戦争の厳しさと食糧不足で、やせこけて帰ってきました。その姿におどろき、皆涙しました。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「空襲のおそろしさ ～ 名古屋」

私は、昭和17年3月に女学校を卒業と同時にお国のために働こうと、名古屋の三菱重工業航空機製作所に勤務しました。この会社は、陸軍と海軍の軍用機を作る会社でした。入社当初、辺りや町へ出た時の様子はとてもおだやかで、戦争中とは思えませんでした。しかし、月日が経つと共に戦況は悪化し、外地の島々の玉砕など耳にするようになりました。

昭和19年、まだ寒い頃でした。朝の4時30分頃、空襲警報のサイレンにとび起きました。私たちの寮の向こうの工場に焼夷弾が火をふきながら何発も投下され、一瞬のうちに火の海と化しました。その後、自分の会社へ出勤、仕事を始めようとした時、再び空襲警報のサイレンが鳴り、急いで壕に入りました。すると、

まもなく解除になり、ほっとしました。ところが、この日は警報が4回もあり、最後の4回目が本格的な空襲だったのです。壕内に入った私たちは、訓練で教わったように目と耳をしっかりと押しさえ、B29の様子をうかがっていました。すると、まもなく敵機襲来。すごい音で爆弾が次々に投下され、ものすごい地ひびきです。壕も私たちの体も恐ろしいほどゆれ、悲鳴があちこちからあがりました。（どうかここに落ちませんように……）と祈るしかありませんでした。

敵機の去った後は、見るもみじめな状況で手のつけようもありません。工場は跡形もないほどに破壊されたり焼け落ちたりで、見る影もありません。*1 私達の寮の内外には、不発弾がいっぱいあり、所長の命令で家の近い人は、家で待機することになりました。私は、すぐに家に帰ることにしましたが、熱田駅で1時間電車を待つ間にも空襲警報が入り、本当に怖かったです。それでも何とか実家にたどり着き、ほっと胸をなで下ろしました。

2, 3日の滞在予定で、会社へ出かけようとしても、その会社がどこにあるのかも分かりません。それでも私は、お国のためと思い出かけようとする、近所のお年寄りに、「行ったらだめだ！」と止められました。仕方なく家に留まりましたが、他の人は会社や工場を探して働いているのではと思うと、自分が国賊に思えてきて、いても立ってもいられなくなりました。近くの学校に疎開していた陸軍病院へ奉仕作業をお願いして、お手伝いさせてもらっているうちに、終戦を迎えました。

(写真:「昭和の歴史 集英社」より)

三菱重工飛行機工場

当時、名古屋は航空機工業の中心で、全国生産の6割を占めていた。マリアナを基地としたB29は、航空機工場を徹底的に爆撃したため、飛行機が完成する前に破壊されることとなった。

集英社「昭和の歴史」

第8巻より



▲ 爆撃を受けた後の三菱重工飛行機工場

*1 1944年(昭和19年)12月13日、B29爆撃機90機による千種区(みづひし)の三菱重工業名古屋工場(跡地は現在ナゴヤドーム)へ初の本格的空襲が行われた。天候などの関係から、爆弾は思うように工場に命中せず、米軍は何度も爆撃をくり返し、6回もの爆撃で工場を壊滅させた。